

## 辞書から見た接尾辞『的』の変遷 (Ⅲ)

### — 「的」の記述に関する考察 —

王 娟\*

#### はじめに

言語学は言語の歴史的研究にはじまる。個別言語の過去の文献などの資料を研究してその変化を明らかにし、言語の全貌を掴むというのは、現在使用している言語の特性を理解するにも欠かせない重要な研究だと考えられる。

王 (2010: 368) は、国立国語研究所の言語調査によると、「的」の日本語の全体にある使用率順が明治 (1877~1878年) の上位100にも入っていなかったのが1956年の第10位にまで上昇したことから、明治 (1877~1878年) から1956年までの百年も経たないうちに、接尾辞「的」の使用に著しい位置の変化があった、と述べている。このような変化の激しいことばの変遷を探ることは、言語一般の変化の規則性を見るには大変重要な意味がある。

筆者は、長年日本語の接尾辞「的」に焦点を当て、様々な角度からその歴史的变化や現代語における特徴などを究明しようとしている。王 (2010) は、国語辞書を踏まえて、①「的」についての記述、②「的」の語基について語種及び意味分野による分類と、具体的な変遷、③「的」が増加する背景を考察してみた。しかし、明治時代から現在までの国語辞書における「的」の記述に関する考察は、決して十分とはいえない。それで、本文は、『和英語林集成』初版 (1867) (以下、『和』初と略記) から『広辞苑』第六版 (2008) (以下、『広』六と略記) まで、全部で15冊の国語辞書を中心に、国語辞書における日本語接尾辞「的」に関する記述の変遷を詳しく整理してみようことを、課題としている。

なお、本論は、筆者が九州大学に提出した博士論文「日本語の接尾辞『的』に関する歴史的研究 — 認知言語学の視点から」の一部未公開の内容に基づき、修正を加えたものである。目的は、通時的な視点により、歴史言語学の立場から明治時代以来の日本語接尾辞「的」の変遷状態を究明することである。国語辞書を使用する理由は、国語辞書が出版された当時の言語の様子を反映する資料として信憑性が高いためである。

#### 1 調査の対象語彙

本研究は、『和』初から『広』六まで、全部で15冊の国語辞書を中心に調査する。時期的に最も古い『和』初は、1867年に出版された日本語辞書<sup>1)</sup>で、始めて見出し語に品詞表示を付したものとされている。『和』初から1908年に出版された『ことばの泉』大增訂補遺 (以下、『補遺』と略記) まで、入手した辞書全8冊を調査することにより、接尾辞「的」の最初の出現から明治期までの変遷を考察する。一方、大正時代以後2008年までに出版された国語辞書の中からは、7冊を選定した。以上調査対象とした辞書は、全部で15冊である。それぞれの出版年度、辞書名、編集者、収録語数などの情報は、筆者が以前発表した論文の中ではすでに公開したが、読者の便宜をはかるため、改めて表1に示す。

本研究の調査対象は、各辞書の大項目の見出し語と小項目の見出し語で意味の説明の付いている語であり、使用例として表示されるだけで意味の説明がない語は収集対象としない。例えば、『広』六

\*：中国厦門大学嘉庚学院日本語学科

表1 15冊の国語辞書の詳細

	出版年度	辞書名/略記	編集者	収録語数
1.	1867年(慶3)	『和英語林集成』初版/『和』初	J・C・ヘボン	2万余
2.	1872年(明5)	『和英語林集成』第二版/『和』二	J・C・ヘボン	2万2千余
3.	1886年(明19)	『和英語林集成』第三版/『和』三	J・C・ヘボン	3万5千余
4.	1888年(明21)	『ことばのはやし』/『はやし』	物集高見	2万4千
5.	1891年(明24)	『言海』/『言海』	大槻文彦	4万
6.	1894年(明27)	『日本大辞林』/『大辞林』	物集高見	15万
7.	1898年(明31)	『ことばの泉』大增訂/『大增訂』	落合直文	13万
8.	1908年(明41)	『ことばの泉』大增訂補遺/『補遺』	落合直文	20万余
9.	1925年(大14)	『広辞林』/『広辞林』	金沢庄三郎	16万
10.	1939年(昭14)	『辞苑』/『辞苑』	新村出	約16万
11.	1955年(昭30)	『広辞苑』第一版/『広』一	新村出	20万余
12.	1969年(昭44)	『広辞苑』第二版/『広』二	新村出	約20万
13.	1983年(昭58)	『広辞苑』第三版/『広』三	新村出	20万余
14.	1998年(平10)	『広辞苑』第五版/『広』五	新村出	23万
15.	2008年(平20)	『広辞苑』第六版/『広』六	新村出	24万

には、「じぎやく【自虐】自分で自分を責めさいなむこと。— てき【自虐的】自分自身を責めて苦しめるさま。」がある。「自虐的」は、見出し語として表示され、意味の説明も付いているので、本研究の収集対象となる。同じ『広』六には、「ぐうはつ【偶発】偶然に発生すること。思いがけず起こること。『— 的な事件』『— 犯』」がある。「— (偶発) 的な事件」の「偶発的」はただ使用例として表示されているが、「偶発的」の意味についての説明がついていない場合、「偶発的」は収集対象としない。ただし、調査対象とはならないものも、考察の部分では、必要に応じて検証し、論述することがある。

## 2 分析

### 2.1 調査結果の全体像

この節では、各辞書から収集した「機械的」のような「的」付きナ形容詞<sup>2)</sup>の語例の全体的状況について述べる。本研究は、主に通時的観点から「的」の語基および「的」の変遷をみるため、データを整理する際には各辞書の語例の異なる語数を中心に考察を行う。菅野(1980:38)は、「新聞広告50年間の6つの時点(昭和4、14、24、34、44、54)での使用状況を比較したところ、『○○的』の比率は、昭和44年が最も多く、形容動詞中の3分の1近くに達していた」と述べているが、本研究のデータも同じ結論になるのか、調査してみる。まず、各辞書から収集した語例の数と一年あたりの増加語基数を表2にまとめてみる。なお、一年あたりの増加語基数を示すのは、各辞書の間にある間隔年数が均一ではないので、増加率を比較するのに同じ長さの期間で計算する必要があるためである。一年あたりの増加語基数をグラフで表示すると、図1のようになる。

表2と図1の結果から分かるように、1898年に出版された『大增訂』から「的」の語例を収録し始めているが、それ以降「的」の語例は次第に増える一方である。特に、増加の勢いは、昭和前期から昭和中期までは比較的安定している。また、増加率が最も高いのは1998年に出版された『広』五である。その前の時期、つまり昭和後期の低迷は、それと対照的である。本研究は、大体15年間隔で中型の国語辞書を調査することになっているから、『広辞苑』第四版(1991)は調査していない。が、永田(1993:311)には、次の記述がある。

表2 15冊のデータ数および増加数

番号	辞書名 (出版年度)	「的」の語例数	一年あたりの増加語基数 <sup>3)</sup>
1.	『和』初 (慶3/1867)	0	
2.	『和』二 (明5/1872)	0	
3.	『和』三 (明19/1886)	0	
4.	『はやし』 (明21/1888)	0	
5.	『言海』 (明24/1891)	0	
6.	『大辞林』 (明27/1894)	0	
7.	『大增訂』 (明31/1898)	13	3.2
8.	『補遺』 (明41/1908)	57	4.4
9.	『広辞林』 (大14/1925)	102	2.6
10.	『辞苑』 (昭10/1935)	150	4.8
11.	『広』一 (昭30/1955)	228	3.9
12.	『広』二 (昭44/1969)	250	1.6
13.	『広』三 (昭58/1983)	266	1.1
14.	『広』五 (平10/1998)	425	10.6
15.	『広』六 (平20/2008)	450	2.5

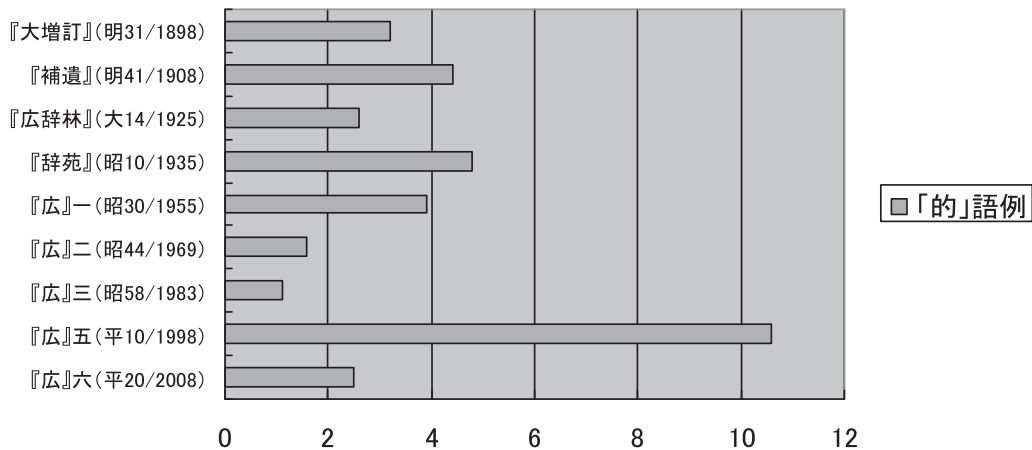


図1 「的」語例の一年あたりの増加語基数

(『広辞苑』第三版と比べると第四版の場合) 相の類については「精力的」、「国家的」、「实际的」、「庶民的」、「衝動的」、「人為的」のように「○○的」が新収項目で40項目入っているのに気がつく。

永田 (1993) の調査結果を参考にすると、特に『広辞苑』第四版 (1991) から『広』五 (1998) までの時期、つまり20世紀90年代、平成初期は、「的」の語基が急増していると考えられる。

しかし、『図説日本語』(1986)は、「造語力という点からみると(中略)的の生産力が大正期にもっとも大きい(中略)昭和初期に一度下がった的の造語力が第二次大戦後ふたたび息を吹き返したように見える」という結論を出している。本研究の調査から分かるように、大正年代は「的」の生産力が二番目に低い時期である。「ふたたび息を吹き返した」のは、1945年の第二次大戦の終戦後ではなく、もっと早い時期の昭和初期からである。『図説日本語』(1986)の調査結果は、本研究の調査結果と一致しない。その原因としては、『図説日本語』(1986)の調査対象は、『改正増補和訳英辞書』(1869)、『附音図解英和字彙第二版』(1885)、『井上英和大辞書』(1915)、『研究社新英和大辞書第一

版』(1927)、『研究社新英和大辞書第四版』(1960)といった英和辞書で、「的」の訳語としての使用変化は反映しているものの、一般用語としての「的」の使用状況は必ずしも反映していないということが考えられる。

## 2.2 「的」についての記述の変遷

本節では、各辞書の「的」についての記述を、主に「的」の語源、語基の語種、品詞、「的」の意味などの内容から整理してみる。

まず、各辞書の「的」についての記述を表3に示す。

表3 各辞書の「的」についての記述

	発行年	書名	「的」についての記述
1.	1867年(慶3)	『和』初	(無)
2.	1872年(明5)	『和』二	(無)
3.	1886年(明19)	『和』三	post. pos. Of, used also as adj. particle: kwagaku teki sakuyō, chemical action; baka teki, = baka-mono, a dunce.
4.	1888年(明21)	『はやし』	(無)
5.	1891年(明24)	『言海』	(接尾)〔驀地、怪底、ナドノ、地、底、ト同音ノ語ナリ〕漢語ノ末ニツク語、之ノ意ヲナス。
6.	1894年(明27)	『大辞林』	(無)
7.	1898年(明31)	『大增訂』	〔接尾〕的。『もと、支那の俗語』(語源)漢語にそへて、之の字の義を示するに用ゐる語。「消極てき」「美てき」
8.	1908年(明41)	『補遺』	〔接尾〕的。㊦(轉じて)云々の如き性質を帯たる意を示すに用ゐる語。「まるで、商買てきた」「試験てきに行ふ」
9.	1925年(大14)	『広辞林』	(接尾)名詞に添へて、其性質を帯び又は其状態をなす意を表はす語。「学者―」「紳士―」
10.	1939年(昭14)	『辞苑』	(接尾)(英語の形容詞 Democratic などの語末の tic を訛ったものといふ)名詞に添へて、「なる」「の」又はその性質を帯び、その状態をなす意をあらはす語。「文学―」
11.	1955年(昭30)	『広』一	〔接尾〕(中国語の「的」(助詞「の」にあたる)をそのまま音読した語)名詞に添えて「なる」「の」又はその性質を帯びる、その状態をなす意をあらわす語。「文学―」
12.	1969年(昭44)	『広』二	〔接尾〕(中国語の「的」(助詞「の」にあたる)をそのまま音読した語)名詞に添えて、その性質を帯びる、その状態をなす意をあらわす。「文学―」
13.	1983年(昭58)	『広』三	①〔名〕①まと。めあて。「射―」「目―」②あきらかなこと。間違いのないこと。「―然」「―確」③(中国語の「的」(助詞「の」にあたる)をそのまま音読した語)名詞に添えて、その性質を帯びる、その状態をなす意をあらわす。「私―」「一般―」④⇒てき(敵) <sup>4</sup> ②〔接尾〕人名や人を表す語などに付いて、「…であるもの」という意を表す。「権(ごん)―」「官―(官吏のこと)」
14.	1998年(平10)	『広』五	①まと。めあて。「射的・目的・的中」 ②あきらかなこと。間違いのないこと。「的然・的確」 ③(中国語の「的」(助詞「の」にあたる)をそのまま音読した語)名詞に添えて、その性質を帯びる、その状態をなす意を表わす。「私的・一般的」 ④人名や人を表す語などに付いて、親しみや軽蔑の意を添える。「権(ごん)的・官的」 ⑤⇒てき(敵)④

	発行年	書名	「的」についての記述
15.	2008年(平20)	『広』六	①(中国語の「的」(助詞「の」にあたる)をそのまま音読した語)名詞や句に添えて、その性質を帯びる、その状態をなす意を表す。江見水蔭、女房殺し「此石動くべきか、動かざるべきか、お鉄は判断に苦しむ—挙動で」。「公—」 ②(接尾語的に)…として、…においての意を表す。「映像—にすばらしい」「わたし—に」 ③人名や人を表す語などに付いて、親しみや軽蔑の意を添える。「権—」 ④→てき(敵)3

表3から分かるように、『和』初版と『和』二には、「的」についての記述がまだなかった。初めて「的」についての記述を載せたのは、1886年に出版された『和』三である。その辞書では、「post. pos. Of, used also as adj. particle: kwagaku teki sakuyō, chemical action; baka teki, = baka-mono, a dunce.」のように英語で「的」の意味と用法について述べており、またローマ字で語例を挙げている。『和』三は「的」を形容詞性接尾辞の品詞に確定している。現代的な「的」の最も古い用例は、中村正直が訳した『西学一斑』(1874)である<sup>4)</sup>が、それは最初に「的」について記述した『和』三と11年の間隔がある。一つの新しい言葉が発生し、また10年前後の定着時間を経て社会で広範に認められてから辞書に採録されるのは、言語の発展規律に合い、互いに「的」の発生時期を検証することにもなると考えられる。『和』三以後の辞書のうち、「的」についての記述がなかったのは、1888年に出版された『はやし』と1894年に出版された『大辞林』だけである。この二つの辞書に「的」の記述がないのは辞書の編集方針によるものと思われる。

一方、「的」の語源に関しては二種類の説がある。一つの説は、中国語との関連を指摘したもので、これは、「的」の語源の主流である。この説の最初の記述は、1898年に出版された『大增訂』で、「的」は「『もと、支那の俗語』(語源)」と述べている。また、『広辞苑』の各版も、「中国語の『的』(助詞『の』にあたる)をそのまま音読した語」のように中国語に起源があると述べている。もう一つの説は、英語の「-tic」との関連を指摘したもので、1935年に出版された『辞苑』は「英語の形容詞 Democratic などの語末の tic を訛ったものといふ」と述べている。なお、他の辞書は、語源について言及していない。

次いで、「的」の語基の語種に関する記述を見る。1891年に出版された『言海』と1898年の『大增訂』は、「的」の語基は「漢語」であると述べている。しかし、1908年に出版された『補遺』には、「的」が「漢語」に付くといった記述はない。この記述の変化から、「的」の語基の語種に何か変化が生じたのではないかと予想されるが、実際、データを見ると、その予測が正しいことが分かる。『大增訂』までの辞書から収集した語例はすべて漢語であるが、『大增訂』では「場所的」という語基が混種語の見出し語があったからである。つまり、『大增訂』以来、「的」の語基は必ずしも漢語ではなくなったということである。さらに、『大增訂』以後の辞書では「的」の語種に関する説明は消え、代わって品詞の視点からの説明が出現している。この変化を考慮すると、『大增訂』以後、「的」の語基が漢語であるという特徴は維持されず、語基の語種は漢語から混種語、和語、外来語などへと広がっていった可能性がある。そこで、本研究が対象とする辞書のデータを考察すると、1935年の『辞苑』に「鵠的」という語基が和語の見出し語を確認できた。また、1955年の『広』一から「アジヤ的」、「アポロ的」のように語基が外来語である見出し語が現れている。これらの語例は、前述の予想が的確であったことを証明するものである。

次に、語基の品詞を見る。本研究が対象とする15冊の辞書のうち、「的」の品詞に関する記述が出現したのは1925年の『広辞林』が最初で、「名詞に添へて」と記述している。その後、1935年の『辞苑』から1998年の『広』五まで、すべて同じ記述をしている。つまり、「的」が「名詞」に添え

られるという特徴は、大正時期から1998年頃までの辞書に一貫して記述されたということである。しかし、2008年の『広』六の記述には変化が生じた。それまでの「名詞」という記述が「名詞や句」になったからである。確かに、新聞や雑誌などでは、以下の例文のように、「的」が語以外の文や句に接続している表現をしばしば目にする。

(1)

そう考えれば、21日のおわび放送も、キー局のフジテレビが謝罪会見をすべきなのに、『関西テレビがやったことだ』的な対応だ。(「声」2007年1月27日)(5)

つまり、「的」の語基の品詞に関する記述は、「漢語⇒ $\phi$ ⇒名詞⇒名詞や句」のように変化してきたということである。

さらに、「的」の意味に関する記述を見てみよう。初めて「的」の意味について説明したのは1891年の『言海』である。その後、1898年の『大増訂』にも、「的」の意味に関する説明がある。この2冊の説明はほぼ同じで、「之の字の義」とある。『言海』には具体的な語例がないが、『大増訂』の語例を観察すると、「的」の意味は実際に「之の字の義」だけでないことが分かる。例えば、以下の語例である。語例の説明は、同じ『大増訂』から引用したものである。

(2)

「機械的」：「機械の如く」

「貴族的」：「行ふこと、すべて、貴族の如くなること。儀式ばること。」

「覚性的感動」：「身体の健全と、羸病とに関係する下方のかんどう」

「審美的感動」：「心理学の語。物事の美醜に関する感動。」

「先天的性能」：「心理学の語。祖先の遺伝よりきたれる性質、能力。」

(2)に示している各見出し語の説明から分かるように、「的」には、「之」の意味以外に、「…の如く」、「…と関係する」などの意味もあり、実際に「的」の意味は「之の字の義」より多様であった。

「的」の意味について、1908年に出版された『補遺』には、初めて「云々の如き性質を帯たる意を示す」という指摘がある。その後の記述は、基本的に『補遺』の説を踏襲して、説明をさらに詳細に陳述している。一番新しく出版された『広』六には、①その性質を帯びる、その状態をなす意を表す、②…として、…においての意を表す、という二つを挙げている。『広』六で挙げている「的」の意味は、『広』五までの記述より一つ増えている。それは、「…として、…においての意を表す」というものである。近年「私(わたし)的」、「気持ち的」、「僕的」のような新しい「的」付きナ形容詞をずいぶん頻りに耳にするようになったが、『広』六までの「的」についての説明では、この新しい用法の解釈はできないことから、『広』六で追加された新しい意味は、新しい時代の言語の変化に応じたものと考えられる。

### 2.3 「的」付きナ形容詞についての説明の変遷

前節では、各辞書の接尾辞「的」についての記述を見てきた。この節では、各辞書の「的」付きナ形容詞についての説明について考察してみたい。「的」付きナ形容詞の説明の考察を通して、「的」付きナ形容詞の意味の変化を分析してみたい。結論から言うと、明治時代から平成まで、「的」付きナ形容詞の意味には、全体的に表現する意味の多義化と抽象化、修飾する対象の多元化、という三つの傾向がみられる。

以下では、「機械的」を例として論じてみたい。この語を例にする理由は、最初に「的」付きナ形容詞を収録し始めた『大増訂』から最新の『広』六まで、全ての辞書に収録されているからである。他の語は、途中から出現したり、また途中で消えたりすることがあるが、この語は前述のように全ての辞書に出現しているため、「的」の全時期における変遷を考察するための適切な対象と考えられる。まず、「機械的」の各辞書での説明を次の表4にまとめる。

表4 「機械的」の各辞書での説明

辞書番号と辞書名	説明
7. 『大増訂』	機械の如く、ただ、他より命ぜられし事のみをして、その他をせぬこと。
8. 『補遺』 <sup>6)</sup>	【機械的感觉】心理学の語。外感覚におなじ。 【機械的沈殿岩】地質学の語。碎頁岩におなじ。
9. 『広辞林』	①機械の装置あること。②機械が動力のため物理的に動くが如く、其活動に何等精神なく、ただ他よりの命令又は仕向に従ひて動くこと。
10. 『辞苑』	①機械の装置あるさま。②機械が動力によって物理的に動くように、其の活動に自主の精神なく、唯他の命令に従って動くこと。
11. 『広』一	①機械の装置で、仕事をするさま。②動力にしたがって機械が運動するように、受動的・盲目的に活動をなすさま。
12. 『広』二	①機械が動くさま。②力学的。力学の法則に還元できる過程についていう。③機械が運転するように動くこと。また、受動的・非個人的なさま。
13. 『広』三	①機械が動くように単調な動きを見せるさま。「一に手を動かす」②個性的でなく、型どおりのさま。「一に処理する」「一に目を通す」③力学的。力学の法則に還元できる過程についていう。
14. 『広』五	①機械が動くように単調な動きを見せるさま。「一に手を動かす」②個性的でなく、型どおりのさま。「一に処理する」「一に目を通す」③力学的。力学の法則に還元できる過程についていう。
15. 『広』六	①機械が動くように単調な動きを見せるさま。「一に手を動かす」②個性的でなく、型どおりのさま。「一に処理する」「一に目を通す」③力学的。力学の法則に還元できる過程についていう。

表4を見ると、『大増訂』の「機械的」の表現する意味はただ一つであったが、『広』六になると三つにまで増えていることが分かる。その意味の数からだけでも「機械的」という語の多義化が窺える。以下、詳しく見てみよう。

『大増訂』の説明によると、「機械的」には、ただ一つの意味しかない。その意味は、現代日本語に言い換えると「機械的な動き」で、人間の行動や仕事をする態度を指すと思われる。この意味は、時代に沿って微妙に変わっていく。まず、『広辞林』になると、「何等精神なく」という文字が加えられ、『大増訂』で述べた人間の行動を指す意味から人間の精神の面に言及する意味に広がっているのが分かる。また、『広』一になると、「受動的・盲目的」という表現が加えられ、人間の精神的な面における意味をより強調するようになっていく。さらに、『広』三になると、「個性的でなく、型どおりのさま」という表現に変わっている。この新しい表現は、それまでの表現と比べると、解釈の仕方が抽象的になったことが分かった。つまり、「機械的」のこの項目の意味からは、表現の抽象化が見えるということである。

また、「機械的」の二番目に加えられた意味で、『広辞林』で初出の「機械の装置あること」という新しい意味も、時代に沿って変化を経ている。『広』二までの記述は、あくまでも「機械」の様子を表現しているが、『広』三からは「機械が動くように単調な動きを見せるさま」という表現に変わった。この表現の変化により、その指示対象は、「機械」から「機械でない他のものやひと、こと」に広がった可能性がある。つまり、修飾対象が多元化されたということである。また、この多元化は比

喩により成立したため、その過程には抽象化も同時に起こったと思われる。

以上、「機械的」を例としながら、「的」付きナ形容詞の意味の多義化と抽象化、修飾対象の多元化、という三つの変化の傾向を見てきた。

この「機械的」に見られる三つの変化は他の語にも確認される。表5を参照されたい。早い時期に収録され始めた幾つかの語をまとめたものである。時代による説明の変化を見るために、各語の最初に収録された辞書の説明と最新の『広』六の説明を上下に並置してある。

表5 「的」付きナ形容詞の説明の変化

番号	語例	辞書番号と辞書名	説明
1.	端的	7. 『大增訂』	ものあたりに。てきめん。足利氏頃よりいひそめたる語。
		15. 『広』六	①正しいこと。真実。沙石集10「一を知らんと欲せば」②明白なさま。率直なさま。「その事実に一に示されている」③即座。その瞬間。また、効果がすばやく現れるさま。④てっとりばやく要点をとらえているさま。「一に言えば」
2.	経済的	8. 『補遺』	富を得、これを使用して、欲望を満足せしめむとする意。
		15. 『広』六	①経済に関するさま。②費用・手間のかからないさま。安あがり。「この車は一だ」
3.	形式的	8. 『補遺』	形式を主とする意。
		15. 『広』六	①形式に関するさま。②表面的な形ばかりで、内容が伴わないさま。「一な挨拶」
4.	現実的	8. 『補遺』	現存するさま、又は、実際なるさまの意。
		15. 『広』六	現実に関するさま。現実在即しているさま。転じて、実際に即しすぎて、夢や理想がないこと。「非一」
5.	合理的	8. 『補遺』	道理に合する意。理論的に判断論証する意。
		15. 『広』六	①道理や理屈にかなっているさま。②物事の進め方に無駄がなく能率的であるさま。
6.	古典的	8. 『補遺』	芸術上、古来の典型を重んずる傾向ある意。
		15. 『広』六	①古典のおもむきあるさま。「一な名作」②古典を重んずる傾向があること。また、伝統的。
7.	病的	8. 『補遺』	動物の、精神上、又は、肉体上の、不健全なる現象。
		15. 『広』六	肉体や精神の不健全なさま。また、その異常なさま。「一な神経」
8.	物質的	8. 『補遺』	金銭などの如き、有形上の利益を、目的とすること。(精神的に対して)
		15. 『広』六	①物質に関するさま。②精神より、金銭などの物質に重きを置くさま。⇔精神的。
9.	大陸的	8. 『補遺』	大陸内部の気候。即ち、雨量少く、気温の差異の甚しきこと。
		15. 『広』六	①大陸に特有なさま。②小事に拘泥せず、度量・気魄の雄大なさま。また、感情・感覚などののんびりしているさま。

表5からは、まず「機械的」と同じように、各語の表現する意味の数が増えたこと、つまり各語の意味の多義化が一目瞭然である。例えば、「端的」は、『大增訂』の説明によると、「即座、目の前」という一つの意味しかなかったが、『広』六では、それに新たに「正しい」、「明白」と「てっとりばやく要点をとらえているさま」という三つの意味が加えられている。最初の意味は、ただ客観的に時間の速さと空間的な意味を表現しているが、その後に加えられた意味には主観的なプラス評価の意味もある。これは意味内容の多元化を示すものである。また、時間の速さは客観的に計れるが、正しいかどうか、明白であるかどうかのような評価は、人の判断により変わるため、『広』六の「端的」の意味は時間の速さより抽象的になったと思われる。つまり、「端的」の意味が抽象化したということである。



他に、例えば、「古典的」は、8の『補遺』では、「芸術上、古来の典型を重んずる傾向ある意」のように解釈されており、意味表現の範囲は「芸術上」と限定されている。しかし、15の『広』六ではその限定修飾語は消えている。このことから、現代日本語の中では、「古典的」は芸術に関するだけでなく、芸術以外の物、人や事を指すことも可能になったのではないかと考えられる。その推測を検証するために、ネットから「古典的」の例文を検索してみると、次のような例文があった。

(3)

花菖蒲には古典的な名前が多いと思います。 (<http://pontanikki.exblog.jp/12837464/>)

バレンタインは“手編みマフラー” 希望！意外と古典的な男性の声が続出

(<http://news.walkerplus.com/2010/0117/4/>)

上記の例文の「古典的」の修飾対象は、芸術の範囲に収まらない「名前」、「声」である。このことから「古典的」の修飾対象は多元化されたと言える。

また、元来芸術の分野での「古典的」というのは、芸術のある特定の時期、それに関連する要素などに言及し、それをを用いる際にはある程度客観的な判断基準が存在している。しかし、現代日本語の中では、芸術以外の物、人、事がその修飾する対象になると、前述した「端的」と同じように「古典的」に評価の機能が付くことになる。その評価の判断基準は、人により変わるため、芸術分野の「古典的」より主観的になったとも言えよう。また、その判断基準の客観性が下がったところから言うと、「古典的」の意味は、抽象化したとも言える。

さらに、「病的」の例を見てみる。「病的」は、8の『補遺』の解釈には、「動物の」という限定修飾語があり、15の『広』六ではその限定語がなくなっている。「古典的」の場合と同じように、「病的」の修飾する対象に変化があったと考えられる。実際に、ネットで検索すると、「病的科学」、「病的賭博」、「病的な花」、「病的小説」のように動物以外の具体的なものや抽象的なものを修飾対象とする用例が数多く見つかる。ここでも、修飾対象の多元化、意味の抽象化及び多義化が窺えるということである。

「大陸的」の場合も同じように、具象的な「気候」だけでなく、「感情・感覚」などの抽象的な語を対象とするようになった。すなわち、修飾対象の多元化、意味の抽象化及び多義化である。

しかしながら、もちろん辞書の初出から『広』六まで意味がほとんど変わらない「的」付きな形容詞もある。例えば、「消極的」である。「消極的」の各辞書での意味は、表6のとおりである。

表6 「消極的」の各辞書での説明

辞書番号と辞書名	説明
7. 『大増訂』	名 せききよくてきを見る。
8. 『補遺』	名 消極なることがら。
9. 『広辞林』	(名) 物事の消極なること。
10. 『辞苑』	(名) 消極なるさま。(積極的の対)
11. 『広』一	消極なさま。ひっこみがちなさま。
12. 『広』二	消極なさま。ひっこみがちなさま。
13. 『広』三	消極なさま。ひっこみがちなさま。
14. 『広』五	消極なさま。ひっこみがちなさま。「—な態度」⇔積極的。
15. 『広』六	消極なさま。ひっこみがちなさま。「—な態度」⇔積極的。

表6から分かるように、「消極的」の意味は、最初に収録した『大増訂』から最新の『広』六まで基本的に変っていない。このような語は他にもあるが、数としては多くない。一方、上記の例とは

逆に、表現する意味の数が少なくなり、意味がより限定的になった「的」付きナ形容詞の語例は今のところ見当たらない。

まとめてみると、「的」の語例の明治時代の意味と現代日本語のそれを比べてみると、修飾する対象の多元化、表現する意味の抽象化と多義化の傾向がある。この三つの変化の傾向は、はっきり区分することは難しく、重なっている部分もある。また、時代から言うと、これらの変化が現れてきたのは、大正時代の『広辞林』と昭和中期の『広』一である。この二つの時代を境として、「的」付きナ形容詞は明確に「多義化」、「抽象化」、「多元化」したと言える。

また、王（2011：205-206）で述べたように、「的」は最初、基本的には学術の専門用語として使われていた。しかし、現在「的」は、学術の専門用語としてではなく、曖昧表現の代表例として取り上げられることが多い。その理由は、まさに意味の多義、抽象と修飾する対象の多元にあるのではないかと考えられる。

## おわりに

本文は、15冊の国語辞書のデータに基づき、以下に示す「的」に関する三つの課題に取り組んだ。

- ① 15冊から見たデータの変化の傾向を統計的にまとめる。
- ② 各辞書の「的」についての記述の変遷を見る。
- ③ 各辞書の「的」付きナ形容詞の説明の変遷を見る。

以下では、上記の課題の順番に従い、本文で得た考察結果をまとめる。

まず、統計的にみたデータの変化についてである。1898年の『大增訂』から「的」の語例は収録され始め、それ以降「的」の語例は次第に増える一方であった。特に、昭和前期から昭和中期までの間は比較的安定した増加傾向が見える。一方、増加率が最も高くなったのは1998年の『広』五であったが、これはその前の時期、つまり昭和後期の「的」の低迷と好対照をなす。その次に増加率が高かったのは1939年の『辞苑』であったが、このような本研究の調査結果は『図説日本語』（1986）のそれとは異なるものであった。

次に、各辞書の「的」についての記述の変遷を語源、語基の語種、品詞、「的」の意味などの観点から整理してみる。「的」の語源に関する記述は、主に二種類の説に分けられる。一つは、中国語との関連を指摘したもので、これは、「的」の語源の記述の主流とも言えるものである。もう一つの説は、英語の「-tic」との関連を指摘し、また、「的」の語基の語種に関する記述をしたものである。特に、「的」の語基の語種については、最初は「漢語」、その後、漢語から混種語、和語、外来語等のように広がっている。また、「的」の語基の品詞に関する記述は、「漢語⇒ $\phi$ ⇒名詞⇒名詞や句」のように変化した。さらに、「的」の意味に関する記述は、不十分なところがあるものの、新しい用法が出現したことを如実に反映したものとなっている。

以上のことから、「的」の語例の意味は、明治時代から現代にかけて、修飾する対象の多元化、表現する意味の抽象化および多義化が起こったと結論づけることができる。

## 注

- 1) 『和英語林集成』初版は、日本で最初の英語で書かれた日本語辞書である。内容は、日本語辞書であるが、表記は、英語であるから、和英辞書という名前になっている。
- 2) 筆者は、王・曲・林（2001：146）では、「社会的」、「合理的」、「抽象的」、「積極的」のような「的」が付く

ナ形容詞のことを「的」付きナ形容詞と呼んだ。

- 3) 「一年あたりの増加語基数」を計算する場合、各辞書に新しく収録された語基と削除された語基などの内訳を考慮する上で計算すべきであるが、ここでは全体の変化の流れを掴むために、精密な計算ではなく概略的な計算方法をとる。例えば、『広』一の増加語基数の3.9は、 $[228(『広』一の「的」の語例数) - 150(『辞苑』の「的」の語例数)] \div 20(『広』一の昭和30年 - 『辞苑』の昭和10年)$ のように計算し得た結果である。
- 4) 王(2012:81)を参照。
- 5) 朝日新聞東京本社発行のデータベース『聞蔵Ⅱビジュアル』の朝刊のオピニオン2の投書欄「声」。
- 6) 『補遺』には、「機械的」という単独な見出し語はないが、「機械的感觉」と「機械的沈殿岩」の形で収録している。
- 7) 【外感覚】心理学の語。感覚神経を刺激せらるるによりて、直接におこる感覚。視覚、嗅など、これなり。機械的感觉。

#### 参考文献

- 王娟(2010)「辞書から見た接尾辞『的』の変遷(Ⅰ) — 新出語基部分に関する考察 —」『比較文化研究』第94号, p367-379.
- 王娟(2011)「日本語の接尾辞『的』について — 英語の『-tic(ic)』との関係 —」『比較文化研究』第99号, p203-212.
- 王娟(2012)「日本語の接尾辞『的』について — 中国語の『的』との関係 —」『比較文化研究』第100号, p75-86.
- 王娟・曲志強・林伸一(2001)「『的』付きナ形容詞と非『的』ナ形容詞の分類と意味的特徴」『山口国文』第24号, p1-21. 日本語学論説資料(書籍版及びCD-ROM版(画像データ))に収録.
- 菅野謙(1980)「放送・新聞・雑誌の形容動詞」『文研月報』第30巻4号, p34-43.
- 永田高志(1993)「現代の語彙の変遷 — 『広辞苑』第三版と第四版を比較して —」『文学・芸術・文化』第5巻1号, p75-88.
- 林大監修・野村雅昭・宮島達夫編(1982)『図説日本語』角川書店.

(中国厦門大学嘉庚学院日本語学科)

## Functional and Semantic Changes of the Suffix “-teki” treated in the Dictionaries (Part III)

WANG, Juan

Linguistics started as a historical study of language. In view of that, the research on the changes of the suffix “-teki”, which has undergone dramatic mutation, is significant to the observation of the overall development of language.

This paper analyzes closely the changes of descriptions of the suffix “teki” in 15 Japanese dictionaries, the earliest being the first edition of *A Japanese and English Dictionary* in 1867 and the latest being sixth edition of *Kojien* in 2008. Its analysis is threefold:

1. Observing the trend of data changes collected in these 15 dictionaries.
2. Observing the changes in the descriptions of the suffix “teki” in each dictionary.
3. Observing the changes in the description of adjectives using the suffix “teki” in each dictionary.

From the perspective of historical linguistics, this paper aims to explore the diachronic changes of the suffix “teki” since the Meiji period.